

# 読解力を鍛えよう

2017年1月10日

大東文化大学 経営学部

## 読解力とはなにか

読解力 (reading skill) とは得られたデータの意味や意図を正確にかつ迅速に把握する総合力です。人はだれでも視覚・聴覚・触覚などの感覚器官を通じてデータを取り込むことができますが、常に正しくそれらを理解できるわけではないことはしばしば経験することです。

文部科学省は第2期教育振興基本計画 (2013年) では、“我が国の危機的な状況を回避するための社会の方向性として「自立・協働・創造モデルとしての生涯学習社会の構築」を掲げ、この実現に向けた教育の方向性”として4つの基本的方向性を打ち出しています。その第一番目に**社会を生き抜く力の養成**を挙げています。まるでジャングルにいるかのように社会を自分の力で生き抜かなければならないような文言です。現在が変化の激しい予測不可能であるという切実な状況にあることを示しているのではないのでしょうか。厳しい世界で生き残るためには、変動する状況を少しでも早く、しかも正確に認識する力を涵養することが最重要だということは誰も認めるどころです。

最新の研究によって読解力が人の能力基盤を形成していることがわかってきました。読解はどのようなプロセスによって達成されるかは徐々に明らかにされようとしています。読解力をどのようにして身につければよいのかはまだほとんどわかっていません。このことが知能研究の最前線であると同時に、私たちの本当に向き合うべき課題なのです。

## 誰も驚かなくなった車の自動運転社会

2015年末に**日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能**というニュースが大きく取り上げられました。10~20年後に日本の労働人口の約49%が就いている職業において、機械によってそれらを代替することが可能になるとの推計結果を得たというのです。ロボットや人工知能技術によってさまざまなサービスレベルが変化し、新しい働き方が生まれるとしながらも、同時に人の役割は2極化していくというのです。

また、2016年3月にはGoogleの特別仕様コンピュータAlphaGoが囲碁の世界チャンピオンであるイ・セドル氏との5番勝負で4勝するという圧倒的力を示して世界を驚かせました。もちろん、AI技術開発が無制限に行われることに対して強い危惧も存在します。日本でも**人工知能学会倫理委員会**などの活動が始まっています。

さて、いま世界中でこぞって研究開発が進められている技術に車の自動運転があります。車自体が自律的に判断し安全に目的地に移動するという高度なリアルタイムAI技術を背景にしており、自動運転技術には各種の移行段階があります。それらの技術が確立したとしてもそれを受け入れる社会的な合意や多くの法的な整備も必要になります。しかし、将来「その日」がいつかやってくることを私たちはいまや否定してはいないのではないのでしょうか。

## 読解力は人間能力の根幹をなす

国立情報学研究所(NII)は、人工知能技術の可能性と限界を見極めるプロジェクト「**ロボットは東大に入れるか**」の成果報告会(2016年11月14日)の席上で、東大合格を諦めて進路変更することを発表しました。情報と検索技術によって正解にたどりつく世界史や数学などの入試科目は得

意でしたが、文章の意味を理解して問題文を読み解く「読解力」がなかなか向上せず、国語や英語などについては今後の成績向上に限界があり、現在の技術では難しいと判断したことをその理由に挙げています。そして、AIの性能を上げるよりも中高生の読解力を向上させるほうが直近の課題であるとして研究の方針転換を示しました。

現在のAI技術による言語処理は、外見上では言葉を理解して会話しているように見えますが、人間のような理解をしているわけではなく、内部では高速コンピュータに蓄積されたデータを参照しながら統計的な処理を行い、確率の高そうな答えを導いています。人間では当たり前の「常識」や問題文に書かれていないことを経験に照らし合わせたり推測することによって、人がしているようには「意味」を理解することができていません。

信頼のおける教育基準によって蓄積された国際的な学習到達度調査(PISA)は、教室におけるテクノロジーと学業成績とはほとんど関係なく、学校制度の品質はそこにいる教師の品質より良くならないと報告しています。現代社会でさまざまな機器を使って情報収集することは容易になっていますが、必要とされる批判的思考を身につけることは困難であり、優れた指導による学びが欠かせません。この両者の間にはますます大きな隔たりとなって私たちの前に横たわっているのです。

## 読解力は弱っているのか

どんな教科書も学習内容は文章で説明されているはずです。その文章自体が読めていなければ、教科内容を理解できるはずがありません。NIIによると、全国1万5000人の中高校生を対象として「日本語の文を読んで意味が理解できているか」という調査を2015年から開始し、文章を正しく読み取れない生徒が一定の割合で存在しているという結果を得ました(文章をしっかりと読めば明白に回答できるはずの問題に約3割が正答を選べなかった場合もあったようです)。どうやら個人だけの責任ではなさそうです。

さらに、教科書を意図しない書籍を読むためには、「よく読む」だけでなく、そのために必要な知識や調査が求められるのは当然になります。

NIIによると、読解のためには次のプロセスが必要だとしています。

- 文章を正しく文節に区切って照応関係を正しく認識する。
- 「誰が」「何を」「どうした」「どうしたいか」などの構造を正しく把握する。
- 経験・常識や学んで得た知識の推論によって、未知の用語の意味を実知識の中に位置づける。
- 経験・常識や学んで得た知識の推論によって、未知の関係や概念の意味を実知識の中に位置づける。
- 既存知識と新たに得た知識に推論を働かせて、さらなる知識を獲得する。
- 得られた多数の情報も重要度を適切に割り当て、問題解決の上で必要な情報をうまく取捨選択する。
- 文章以外に、図やグラフ等のほかの表象手段についても同様なことが実行できる。
- 文章と図表表現との同一性を実世界の意味を介して検証する。
- これらの諸段階で、誤りがないかを超越的な視点から検証して修正する。

これらについて日常経験や学びにおいて自ら自覚することがあったどうかを確認してみてください。

今回の読解力調査が、読むという行為になお一層の意味を見いだす機会となることを願っています。

以上